

ヒミツホテル

女子高生..... 308号室
須藤..... 〃
ミワ..... 310号室
サオリ..... 〃
榎田..... 312号室
秀人..... 〃
デリヘル嬢... 311号室
池上..... 〃
ヒミツホテルスタッフ
達央（たつお）
梶
和装のママ
客引き
キャバ嬢
ボーイ
泥酔した男

※各シーンは動線の次第で前後入れ替え可能

ヒミツホテル外、路上

達央、梶 ホテルのそばで煙草を吸ったり電話をかけたたりしている

308号室

須藤 ベッドから出て、服を着る。
女子高生 ベッドに横たわり、その姿を見つめている。

311号室

デリヘル 服を着替え、化粧を直し、持ってきた道具などを片付けている。
池上 シャワーをあびている。

312号室

秀人 メンズ用セクシーランジェリーを履いては台に両手をついてポーズを取り、脱ぎ、別のものを履き、を繰り返している。
榎田 ベッドに腰掛けながら、次にどのランジェリーを履くべきか、どのような姿勢を取るべきかの指示を秀人に出している。

受付

ミワ、サオリが入室手続きをしている。

スタッフ 「あ、インターネットでの予約だったので……割引適用で、前払いになります。
それとウェルカムドリンク……一杯ずつお付けしますけど」
ミワ 耳を受付の窓に近づけながら「あ、ドリンクくれるんですか？」
スタッフ 「あの、こちらから選んでください」
ミワ 「あ、じゃあ私コーヒーで」
スタッフ 「あ、はい……」
サオリ 「私も同じので」
スタッフ 「あ、えっと、コーヒーおふたつですね。……あ、ホットですか」
ミワ 耳を窓にくっつけて「はい？」
スタッフ 「コーヒーは、あの、冷たいのですか」
ミワ 「あ、ホットで」
サオリ 「私も」
スタッフ 「はい、では、あとで部屋までお持ちしますので……」
ミワ 窓から耳を離せない。「わかりました。あの、部屋番、何でしたっけ」
スタッフ 「あ、310号室です。奥にエレベーターありますので……」
ミワ 「はい」ようやく耳を離す。

ミワ、サオリ エレベーターに乗る
サオリ 「狭くない？」
ミワ 「ね」

311号室

池上 シャワーから上がる
デリヘル 荷物を整え終える。
ドア付近で振り返り、無感情に「ありがとうございました。またよろしくお願
いします」
池上 「ああ、どうもね」
デリ 廊下を足早に歩いて行く

ミワ、サオリ デリヘル嬢とすれ違う
ミワ 「……」
サオリ 「なに？」
ミワ 「ううん」
サオリ 「え？」
ミワ 「いやいや」
サオリ 「なあに？」
ミワ 「なんとなくだけど、今の人、素人じゃない人だよな？」
サオリ 「……あ、え、え、ほんと？ え、はじめて見た」
ミワ 「私も」
サオリ 「ふふ」

308号室

須藤 着替えを終え、財布から札を数枚取り出してベッドのサイドテーブルに置く。
女子高生 「……え」
須藤 振り向く。

女子高生 「なんですか、これ」
須藤 「取っておいて」
女子高生 「あの、……私、ウリやってるつもりありません」
須藤 「いや」
女子高生 「あの」
須藤 「……困るよ」
女子高生 「誰にも言いふらしたりしません」
須藤 「そういうことじゃなくて」
女子高生 「もう会ってくれないんですか」
須藤 「一回きりだよ……こういうのは」
女子高生 「なんで」
須藤 「君のほうこそ」
女子高生 「え」
須藤 「どうしてそんなこと言い出すの」
女子高生 「一回で好きになりました」
須藤 「勘違いだよ」
女子高生 「……」
須藤 「頼むから、受け取ってくれ」

女子高生 布団に顔を埋める。

須藤 鞆を持って「じゃあ」
去る。

女子高生 丸めた背中を震わせている。

310号室

ミワ 「おじゃましまーす」
サオリ 「どきどき」
ミワ 「わっ」
サオリ 「あ、すごい……」
ミワ 「意外と落ち着いてるね」
サオリ 「わああ、へえー」部屋を見て回る。

サオリ 「いいところ見つけたね」
ミワ 「ていうか、他にあんまりなかったんだ」
サオリ 「そうなの？」
ミワ 「地方って、こういうの街なかよりインターの近くにたくさんあったりしない？」
サオリ 「あー、むかし何回か行ったけど、高速降りてからあんま距離なかった気がする」
ミワ 「でしょ。福島の前とかも、鬼パンしかない？」
サオリ 「うん、あるね、鬼パン」
ミワ 「二号店も」
サオリ 「ふふ、あるある」

ミワ 冷蔵庫を開ける。「あ、お水入ってる」
サオリ 「無料？」
ミワ 「はい」
サオリ 「すごい。優しい」
ミワ 「ね。優しい」
サオリ 「.....お水欲しくなるもんね、事後は」
ミワ 「ふっ、やだ」

ミワ 「テレビ見ないよね？ 広告うるさい」
サオリ 「うん、要らない」
ミワ 「せっかく大きいテレビだけど.....どっかに電源.....」 テレビのふちに指を滑
らせる
サオリ 「ない？」
ミワ 「うん.....」
サオリ 「あ、消えた」
ミワ 「線抜いちやった」
サオリ 「ふふ、だいじょうぶ？」
ミワ 「たぶん」

311号室

池上 身支度を整え、311号室から出ていく。受付で代金を支払い、ホテルを出る。

310号室

サオリ 「お風呂ひろーい」
ミワ 「ほんと？」
サオリ 「来て来て」
ミワ 「ジャグジー？」
サオリ 「お湯溜めよう」 蛇口をひねる
サオリ アメニティを手にとって「入浴剤いろいろあるよ。.....瀬戸内レモンの香りだ
って」
ミワ 「それいい。溜まったらそれ入れよ」
サオリ 「ああ、瀬戸内感じる」
ミワ 「開けるの早い.....」

路上

池上 達央の肩にぶつかるが、そのまま通り過ぎようとする。
達央 「っだコラ」 煙草をもみ消して追いかける。
梶 達央がそばを離れたことに気づき、電話を切って追いかける。
達央 「おい、.....おい」
池上 返事をしない。
達央 「おい、.....おいてめえ、こっち向けコラ」
池上 返事をしない。
達央 「てめえ舐めてんじゃねえぞ」
梶 達央の腕を捉えて「やめろ」

達央 「おい、おいてめえコラ、おいこっち向け」
池上 「なんだコラ」
達央 「あ？」
梶 「達央！！」
池上 達央に構わず行こうとする。
達央 「んだコラてめえ！」
梶 飛びかかりそんな達央を後ろから羽交い締めにして「やめろってバカ！」
達央 「シカトこいてんじゃねえぞてめえ！！おい！」
梶 「いいかげんしろ馬鹿！！」

308号室

女子高生 ベッドから降り、服を着て、サイドテーブルの紙幣を取って部屋を出る。

廊下

スタッフ 受付から三階へ移動し、リネン室へ。替えのシーツやバスローブ一式をワゴンに揃え、311号室へ入っていく

女子高生 ワゴンを廊下に停めて311号室に入っていくスタッフの後ろ姿を見る。

スタッフ 311号室のクリーニングをする。

女子高生 一階に降りてフロントを覗き込み、無人であることを知る。受付の張り紙を読み、そばにある電話を取って内線ボタンを押す。

スタッフ リネン室に戻り、電話を取る「はい」

女子高生 「あ、308ですけど、……今出ました」

スタッフ 「あ、はい」

女子高生 「あの、お金は……」

スタッフ 「え、あ、……ちょっとお待ち下さい」

スタッフ 一階へ戻り、待っている女子高生に軽く頭を下げ「お待ち下さい……」

受付のパソコンを確認して「もう支払われてます。延長もありませんので……」

女子高生 「？」聞こえない

女子高生 あいまいに会釈をしてホテルの外に出る

スタッフ 311号室に戻ってクリーニングとベッドメイクを済ませ、308号室に入り、ベッドのシーツを剥がし、バスルームのタオルなどを回収してワゴンごとリネン室に戻る。

路上

池上 去る。

梶 達央の頭を引っ叩く

達央 「……すみません」

梶 「おまえ今のが誰だかわかってんのか。ビアンカんとこのケツ持ちだろうがよ」

達央 「え……ニャンニャン女学園の、すか？」

梶 「そうだよ」

梶 池上の姿が完全に消えたことを確認して「俺ちょっと榎田さんここに顔出してくっから、おまえもう余計な人間にちょっかい出すんじゃねえぞ。ここで俺を待ってろ、いいな」

達央 「はい」

梶 「いいな、ここを動くなよ。言うとおりにしなかったらおまえマジでいっぺん……、わかるよな？」

達央 「はい」

310号室

ミワ トイレに入り、洗面所で手を洗い、化粧や髪などの身だしなみを確認する。

ミワ 部屋に戻り「サオリなんでもうパジャマ着てんの!？」

サオリ 「かわいいでしょ」

ミワ 「かわいいけど」

サオリ 「今日のために新調しちゃいました」

ミワ 「だからお風呂の後まで待てなかったの」

サオリ 「そうなの」

サオリ 「他にもいろいろ用意してきたよ、お菓子でしょ、隈取り用のフェイスマスクでしょ、ネイルでしょ、……これ知ってる？」と、プレート状のものを出す。

ミワ 「何？」

サオリ 「スタンプングネイル用のプレート。自分でカンタンに模様が描けるの」

ミワ 「え、すごい」

サオリ 「あとワインとチーズ」

ミワ 「さすが。あ、私ビール買ってあるから」

ミワ 「私も着替えようかな。パジャマは持ってきてないから、……バスローブ？」

サオリ 「着替えて着替えて！」

ミワ 服を脱ぎ始める。

サオリ 「えい」ミワの胸を触る。

ミワ 「わ」

サオリ 「気持ちいい」

ミワ 「わかるよ」

サオリ 「やっぱ女の子のおっぱいっていいな」

ミワ 「ね。特権だよ」

サオリ 「彼氏の胸触ってもこんなフワフワじゃないもん」

ミワ 「え……別れたって言ってなかった？」

サオリ 「え、うーん。何かまた微妙な関係に戻った」

サオリ まだ揉んでいる。

ミワ 「ねえ」

サオリ 「ふふ。私って中身おじさんなのかも」

ミワ 「……中身おじさんで、男と付き合えるの？」

サオリ 「えー、それは、だって」

サオリ 「言葉のアヤでしょ」

ミワ 「サオリは」

給湯完了のアラームが鳴る。

ミワ 「似合っていないよ」

サオリ 「……お風呂鳴ってる。お湯溜まったって」

ミワ 「サオリ、高校のときからそうだったよね。何人も男の子とつきあって、つきあうたびにちょっとずつ雰囲気が変わって。それで、つきあいだしてから三ヶ月くらい立つと、疲れた～って言うてくるのね私に、毎回。でも彼氏のいなかったことなんてないし、なんか、なんていうのかな、強迫観念でもあるんじゃないの」

サオリ 「別にないけど、そんなの……」

サオリ 「お風呂、入らないの？」

サオリ 「女子会なんだよね、これ？」

ミワ 「そうだよ」

ミワ 「女子会でいいじゃん、人生、ずっと。よくない？」

ミワ 「服、化粧品、甘いもの。楽しいよね？ 爪がキレイに塗れてるとワクワクするでしょ。そういう感じ。それだけじゃだめ？」

ミワ 「彼氏なんてどうせすぐ別れるよ」

サオリ 「うーん」

ミワ 「サオリは絶対ムリしてるから……」

サオリ 「えー、そうかな、えー」

サオリ 「でも、でもね、それとは別にね、ミワのことはちゃんと愛しているよ」

サオリ 「ね」

サオリ 「きゃあ！」

ミワ 鼻血が出る。

サオリ 「え、やだやだ、えー」

ミワ 鼻血の処置をしているうちに、やるせない気持ちになる。

サオリ 「だいじょうぶー？」ティッシュを渡す。

ミワ 「ごめん、ちょっと……」サオリを押しつけてトイレにこもる。

路上

和装のママ 呼びつけておいたタクシーのもとへ常連の客を見送りに出る。微笑んだり、客の腕を両手で軽く掴んだり、愛想を振るう。

「今日はありがとうございました。またお待ちしておりますね」

和装のママ 発車したタクシーに向かって美しいお辞儀をする。

達央 煙草を吸いながらあたりをうろつく。
女子高生 ホテルの前でしゃがみこんでいる。
達央 女子高生に気づき、遠巻きに見る。

キャバ嬢が現れる。

キャバ嬢 携帯を取り出し「あ、もしもし～？ いま何してました？ え？ うん、うん、え～じゃあお店来てくださいよ。暇なの。え？ うん、あ～、そっかあ。どこ？ 宮崎？ え～、じゃあマンゴー買ってきてくださいよ～。うん、うふふ、うん、じゃあ金曜？ うん、はい、うん、絶対ですよ。ふふっ、はい。じゃあまた。は～い」

キャバ嬢 しばらく携帯を操作している。

客引き 客になりそうな人間がないかとうろつく。
達央 女子高生に近づいて連れ合いのふりをする。
客引き 自分のほうを見ている達央をちらと睨むが、何も言わずに通り過ぎる。

達央 「ちょっと、あんた」
女子高生 「え……？」
達央 「こんなところに座ってんなよ」
女子高生 「……」
達央 「いやべつに脅してるわけじゃなくて」
女子高生 「……」
達央 「どこに住んでんの？」
女子高生 「……」
達央 「電車もう無いけど」

ホテル

スタッフ リネン室で新しい一式を揃え、ワゴンに載せる。

梶 ホテルへ入り、312号室のドアをノックし、秀人が開けてくれて中に入る。

スタッフ 梶が312号室に入ると同時にリネン室を出、308号室のクリーニングとベッドメイクをする。

312号室

梶 ノックし「失礼します」
ドアを開けようとするが、開かない。
槇田 秀人にドアを開けるよう身振りで指示する。
梶 秀人が出たことにびっくりして「あ、ごめん、ありがとう」

槇田 「梶か」
梶 「はい、今だいじょうぶでしたか？」
槇田 「うん、いいよ」
梶 「失礼します」部屋に入る。
槇田 「なんか今、表が一瞬賑やかになったんだけど、あれ達央君じゃないの？」
梶 「あ、はい」
槇田 「威勢良かったよね」
梶 「あいつはほんと、ただのチンピラですからね……」
槇田 「苦勞する？」
梶 「ええ、まあ。こっちはまた尻拭いですよ」
槇田 「ふふ、そう」
秀人 「あの……」
槇田、梶 秀人を見る。
梶 「あ、俺？」
秀人 「今日って、三人なんですか」
梶 合点したように「……あ、いや、俺はもう帰るよ、だいじょうぶ」
槇田を向いて「あの、マナミの件、確認取れたんで。けっきょく金平さんに手
回してもらいました」
槇田 「そう」
梶 「そういうことなんで、俺ここで上がりますんで」
槇田 「わかった」
梶 「一度 CHICAGO に顔出して、あ、何なら帰り送ります？ 俺終わったらこっ
ちまで車回しますよ」
槇田 「うん、そうしようか、一時間後くらい？」
梶 「あー、ここ何時間で取ってます？」
槇田 「泊まりで取ってるけど、いいよ」
梶 「はい」
軽く会釈して「失礼します」去る。
秀人 ドアのほうを見ている。
槇田 「どうしたの」
秀人 「あ」
槇田 「醒めちゃった？」
秀人 「いいえ……」
槇田 「こっちに座る？」
秀人 「はい」槇田の隣に腰掛ける。
槇田 しばらく秀人の背中を撫でる。

310号室

ミワ トイレの便座に座って鼻血が止まるのを待っている。
サオリ トイレの前に立って携帯をいじっている。
ミワ 「サオリ」
サオリ 「血、止まった？」
ミワ 「私の鞆どこ？」
サオリ 「向こうの部屋じゃない？」
ミワ 「財布入ってるから、取ってきてくれない？」

サオリ 「財布ね、わかった」

サオリ 「開けますよ～」

ミワ サオリがドアノブをひねった途端、ドアの隙間から腕を延ばし財布を受け取る。財布から紙幣を数枚出してドア越しにサオリに渡す。

サオリ 「なに？」

ミワ 「ここの部屋代割り勘した分と、帰りのタクシー代。ごめん、鼻血止まらないから、帰ってもらえないかな」

サオリ 「うそー」

ミワ 「ごめん」

サオリ ためらいがちに金を受け取る。「せっかくいろいろ準備したのに」

サオリ 「ワインも買ったんですけど」

ミワ 扉越しにさらに千円渡す。

サオリ 「いいよ、そんな」

ミワ 手を引かない。

サオリ 「じゃあ……もらうけど」

ミワ ドアを閉める。

サオリ ベッドルームに戻り着替えをし、携帯をいじる。

サオリ 冷蔵庫に水が入っているのを思い出し、封を切って一口飲んで大きく息をつく。冷蔵庫に水を戻し、鞆を持って部屋を出ていく。

ミワ 便座に座ったままだだれている。鼻血はとっくに止まっている。

路上

女子高生 「今日、ゆっくりと時間をかけてこのあたりを歩いてみたの」

女子高生 「潰れたデパートの廃ビルがそのまま残っていた。変な場所に落書きをされた姿で。周りのネオンに照らされて、ぼうっと白く浮かんで。落書きはとても高い位置にあって、少し離れてもよく見えた。アーケードはチェーンの居酒屋とキャバクラばかりで、ふつうの買い物客なんて歩いてない。客引きの男の人達ははしゃいでふざけあっていて、客を引こうとはしていなかった。私のことははじめから見えていないみたいだった」

女子高生 「小さい頃、この街には子供だけで行っちゃいけないって言われてた。なぜか私、フィリピンとかタイとか、アジアの大きな市場みたいなものを想像してた。騒々しくて臭くて、でも光が溢れていて、人の声が途絶えない。昔はそうだったのかもしれない、商店街は賑やかだったって聞いたし、有名な古い映画館も営業してた」

達央 「大勝館のこと？ あれポルノだけど？」

女子高生 「街は今、少しずつ死んでいってる」

女子高生 「駅には広くてきれいなスーパーがあって、赤べこの乳とか栗駒高原の卵とかが売られていて、お客さんがたくさんいた。きっと彼らはあのあとバスに乗って、このへんなんかさっさと通り過ぎて住宅地へ向かうのね」

女子高生 「なんでここにいるんだろう、私」

達央 「さっきここから出てきたっしょ？ え、ここから出てきたからここにいるんじゃない？」

達央 「そういうことじゃないか」

女子高生 「街は人々に忘れられて死んでいくのに、なんで私はまだここにいるんだろうって」

女子高生 「こんなところ、いたくないのに、私はここにこうして座ってる。からだは勝手にそうしてたの。何かを待っていたのかもしれない」

達央 「始発じゃね」

女子高生 首を横に振って

「死って必然的なものでしょう。だから別れは必ずある。じゃあ、出会いは？ 別れることが絶対なら、会うことも偶然じゃないと思う」

達央 「……ふうん？」 たばこに火を点ける。

女子高生 「こんなに人がたくさんいるのに、なんで私とあなたがこうして喋っているんだろうね。ふしぎ」

女子高生 「小川の、川底にささって抜けなくなった小枝みたい。まわりが流れていくのに、私とあなただけそこにじっとしてる」

達央 「川に枝ツッコんでコケ巻きつかせたやつで、よく鯉とか集めてた。なんでそのへんの石にいくらでも引っ付いてんのに、俺らが枝につけたやつをわざわざ食いに来るんだって不思議だったな」

梶 ホテルを出る。あたりを見回して舌打ちする。

達央 「あれ俺の先輩。やたら面倒見のいい人でさ、俺も世話になってんだ」

女子高生 興味なさそうに梶を見る。

達央 「話せば、あんたのこと送ってくれるかも」 待っていると身振りで示し、梶のもとに駆けていく。

達央 「こっちです」

梶 「何してたんだバカ」

達央 「いやあ、ちょっと」

梶 「これから CHICAGO 行くから付き合え」

達央 「え」

梶 「行くぞ」

達央 「え、何ですか」

梶 「ん？ 顔出してくるだけだよ。それから車で戻ってくる」

達央 「ひとり乗れます？」

梶 「あ？」

達央 「あ、えっと、それ、俺は乗っていいんすよね」

梶 「当たり前だろ、乗らないでどう帰るんだよお前。歩くか？」

達央 「いや、はは。……で一、その、他にまだ乗れます？」

梶 「ふたりここで拾うんだよ」
達央 「もうひとり乗せらんないっすかね」
梶 「誰をだよ」
達央 「いやあ……」
梶 「何なんだお前」
達央 「いや正直、何言ってるのかよくわかんない女の子がいたんですけど、夜中だし、あんま放っておくのはどうかなって」
梶 「なんだそれ、気持ちワリい」
達央 「いやあれゼットイ補導されますって。制服だったし」
梶 「勘弁しろよ」歩きだす。

達央 女子高生が待っているはずの方向を見る。

梶 振り向いて「達央！」
達央 女子高生を気にしながらも、梶のもとへ

達央 「……梶さん」
梶 「ん？」
達央 「福島県の人口流出って、たったの3パーセントとか、そんならいらしいっすね」
梶 「はあ？」
達央 「ニュースか何かで見ました」
梶 「お前ニュースなんて見んのか」
達央 「いや、ぜんぜん。一ヶ月にっぺんくらいすかね」

達央 「いや、あの子にそれ教えればよかったなあって。いまふっと思ったんですけど、違うのかな。そういうことじゃないのかな、やっぱ。よくわかんないけど」
梶 「おまえな」
達央 「はい」
梶 「俺に何をアピっておきたいんか知らんけど、……いや、もういいや」
達央 「何すか……」
梶 「俺はとにかく早く寝たい」
達央 「はい……」

312号室

秀人 「達央、って」
槇田 「うん」
秀人 「あの金髪の子ですよ。ちょっと小柄な」
槇田 「知ってるの？」
秀人 「槇田さんが」
槇田 「……」
秀人 「よくその名前を出すから」
槇田 「そう？」
秀人 「彼、いくつなんですか？」
槇田 「さあ。見た感じ25歳くらいじゃないの？」

榎田 「何か飲む？」

榎田 立ち上がって、壁際にあるメニューを手取る。固定電話のボタンを押す。

スタッフ 「はい」

榎田 「スパークリングワインをふたつお願いしたいんだけど」

スタッフ 「あ、はい……。312号室のお客様ですね、スパークリングワインをふたつ……」

榎田 「そう、よろしく」

スタッフ 312号室の前までやってきて、インターホンを押す。

榎田 「来たね」ドアへ

秀人 「パンツ履かないんですか」

榎田 自分のビキニラインを確認するように一撫でし、「平気だろ」

榎田 入口前のワゴンに載っていたふたつのシャンパングラスを持って部屋に戻る。

秀人 榎田を見る。

榎田 秀人の隣に座り「裸でだいじょうぶだったよ」

秀人 グラスを受け取る。

榎田 「誰もいなかった」

秀人 飲む。

榎田 「こういうところは大概そうなんだ」

榎田 飲む。「……まるで便利な幽霊だね」

スタッフ コーヒーを載せたトレイを持って312号室の前に行き、停めてある空いたワゴンにトレイを載せて310号室の前へ。

310号室

ミワ トイレから出る。鏡で顔面をチェックし、身支度を整え、部屋中のアメニティを手当たり次第に集める。最後に冷蔵庫に水があったのを思い出し、開ける。飲んだ形跡があることに気づき、自分も飲もうとして、やめる。

ミワ 部屋を出ようとしたところで、部屋のインターホンが鳴る。

ミワ 扉を開けると、コーヒーを載せたワゴンが置いてある。廊下には誰もいない。

ミワ 「遅くない？」コーヒーを一瞥し、廊下を歩きだす。

路上

泥酔した男とキャバ嬢とボーイが表れる。

泥酔男 「なあ！……なあ！俺知らねえって」

女子高生 声に反応してそちらを見る。

ボーイ 「それじゃ困るんだって」
泥酔男 「俺は知らねえって、だから先輩が払ってくれたんだろっての」
キャバ嬢 「私あなたしか知らないよ、ね、ふたりでマッカラン飲んだよ、忘れちゃったの？」
泥酔男 「忘れちゃったのってよ、だから井上先輩どうしたんだって」
ボーイ 「井上先輩はもとからいないですよ」
泥酔男 「何言ってるんだよ、だから、なんでそう、そうやってなあ、騙そうったってなあ！俺あの人さあ、あの、寿司屋行こうって誘われてさあ、あの、あそこ知ってる？あの通りのさ、すごい高いところ、あるんだよカウンターだけの」
キャバ嬢 「魚紋」
泥酔男 「そうそう、魚紋。わかるでしょお、そこ、行って、もう一軒行こうって言うから付き合いで入ったの、おたくんところ。起きたら先輩いないからさあ、会計済んでんでしょ本当は？ねえ」
ボーイ 「だから！それはここより前の店でしょ？ね、井上先輩と寿司屋行きました、もう一軒クラブかどっか入りました、先輩と飲みました、先輩と別れました。それでひとりでもう一軒入ろうって、それでウチに入ったんでしょ」
泥酔男 「嘘つくなよ！こんな店、あんなこんな店なあ、ひとりだったらこんな店入らねえよ！」
キャバ嬢 「ねえ落ち着いて」
泥酔男 「俺こんな店入らねえよ！！嘘じゃねえよ！」

三人、しばらく押し問答を続ける。

泥酔男 「……嘘じゃないよ、井上先輩いたんだって。俺ずっと一緒だったんだよ……」

三人、去る。

ミワ ホテルから出て女子高生を見つけ、近づく。
女子高生 月を眺めている。

ミワ 「こんばんは」
女子高生 振り向く。
ミワ 「満月だね」
女子高生 「ですね。ゲルマニウムの反射光みたいな」
ミワ 「そういうのしらふで言えちゃうんだね」
女子高生 「何でもしらふで言うしかないです、未成年なんで」
ミワ 「そっか」女子高生の隣に座る。
女子高生 達央が去った方向を見る。

ミワ 「ひとり？」
女子高生 「さあ……」ずっと同じ方向を見ている。

女子高生 やがて、ふいに語り出す。
「私これでも、ちゃんといろいろ考えて生きてるんです。それでも、恥ずかしいことばかりで。さっき起こったことが今もうすごく恥ずかしい。自分がすごく恥ずか

しい。殺してやりたくなる。でも学校があるしお父さんもお母さんもいるから、とりあえず生きていなきゃならないから、恥を、飲み込むしかない。何にも考えていないように見えるのかもしれないけど、私はちゃんといろいろ感じてる」

女子高生 「袖」
ミワ 「え？」
女子高生 「血がついてる」

312号室

榎田 秀人に膝枕をし、横になった秀人の肩や腰をゆっくりと撫でさする。
秀人 「榎田さんって、若い子好きですね……」

榎田 スマホを取る「梶？ うん、ああ、うん。じゃあ、今出るから、下で」
秀人 起き上がる。
榎田 「服を着せてあげようか」
秀人 「いい」
榎田 「そう」ワインを飲む。
秀人 服を着る。
榎田 秀人が服を着終えてから、自分も服を着る。

榎田 「先に出て」
秀人、榎田 ホテルを出る。

ホテル前
ミワ 「うち、すぐ近くなんだけど、来ない？」
女子高生 「……」
ミワ 「寒くない？ ココアでも飲む？」

女子高生 ホテルから出てきた榎田と秀人を目で追う。

女子高生 どこかへ歩きだす。
ミワ 女子高生の姿が消えたあと、袖の血を気にしながら家路につく。

ヒミツホテルでは、スタッフがひとり黙々とベッドメイクをしている。